ものなりと認むるを以て正當とす」と說き[40]、更に又其の翌年にも、「回鶻文字の成立につきては、突厥文字と同じく其の事情を知る可らずと雖、然も其の字形は此の文字の系統を明示するものにして、彼のネストル教徒の用ゐたるシリヤ文字、卽ちエストランゲロ文字より起れるものなるを知る」と論[41]じ其の舊說に復歸したり。氏は回鶻碑文に記さるゝ宗教が、ネストル教に非ずして摩尼教に關說せるものなることを知悉し、又ネストル教の回鶻に入りし時代につきては、その漠北時代に於て何等の證跡の存せざるは勿論、高昌に徒りし以後に於ても「ネストル教の僧[42]侶は佛教徒若しくは摩尼教徒より早く東トルキスタン地方（卽ち後に回鶻の領するに至りし地方）に寺院を設立したるものならんと思へど、史上の事實は却りて之に反するものなり」と爲し、而して又回鶻文字とソグド文字及びネストル教徒の用ゐたるシリヤ文字との間に於る相互の字體の類似程度につきても、自から前揭の表を作成して、ソグド字と回鶻字との極めて相近きものなるを示したる人なれば、此の如く其の所說を復舊したるは極めて奇怪のことに屬すと曰はざる可らず、然れ共斯る考も若しソグド文字が回鶻文字より起れるもの、若しくは單に回鶻文字よりも後のものなりと見る場合に於ては、必ずしも成立せざるは非ず、果然氏は此の點につき、一九〇九年に說を公にし「今眞の回鶻字にて書けるソグド文のかゝる古き碑文（回鶻碑文を指す）の存するよりすれば、ソグド文字なるものは此の後初めて回鶻文字より發達したるものなるかも知れずとの假定も成立す」と曰ひ、更に一九一一年には「ソグド人[43]は本回鶻人より古體の回鶻字を受け、其の體を保持したるものならんが、回鶻人は更に其の後新體を作りて之を用ゐるに至りしならん」と說き、Müller 氏を始め獨佛の學者が、回鶻字を以て後のソグド字と見る說に反對し、ソグド字こそ却りて回鶻字より出でたるものなるべきを主張せり、然れ共ソグド字が回鶻字より出でたるものと認む可らざる理由につい